

認知症地域ケア考える

仙台で懇話会

認知症の人の視点に立った地域ケアの在り方を考える懇話会が5月下旬、仙台市宮城野区の「みはるの杜診療所」で開かれた。診療所を運営する医療法人社団清山会の主催。同区や多賀城市、塩釜市の地域包括支援センター、介護事業所の職員ら80人が参加し、患者本人や地域で支援に当たる専門職員らの話を傾けた。

認知症当事者による物忘れの相談窓口「おれんじドア」を開設する丹野智文さん(41)＝仙台市＝が当事者の思いを語った。

39歳で若年性認知症と診断された丹野さんは「病院や区役所でもっと、障害者手帳の申請など公的援助や相談できる団体の情報を教えてほしい。認知症は誰でもなりうる病気。何も分からないことが本人や家族を不安にする」と訴えた。

清山会が運営する向陽台地域包括支援センター(泉区)は、

「人がつながる居場所を」

さまざまな人が集えるサロンや認知症について学ぶ交流会、当事者会、家族会を開いている。所長の浅倉恵子さんは「人と人がつながる居場所を増やし、認知症の人が安心して暮らせる地域をつくっていききたい」と話した。

「いずみの杜診療所」(泉区)の精神保健福祉士川井丈弘さんは2013年10月から、医師や看護師、理学療法士ら10人の専門職チームで続けている初期集中支援の取り組みを紹介。300件を超す相談家庭への早期訪問を重ね、通院や介護サービス利用につなげた経験から、支援者側が専門家になりすぎず、本人と一緒に楽しみや生きがいを見つけていく姿勢の大切さを指摘した。



専門職チームによる早期対応について説明する川井さん